



本を開いて、
世界を広げる

ウィーン 1938年 最後の日々

2025年6月28日、紀伊国屋書店札幌本店sapporo55ビル1Fインターガーデンにおいて、第63回法学部カフェが開催されました。第63回法学部カフェでは、本学部の高橋義彦先生(政治思想史)のご著書『ウィーン 1938年 最後の日々』(慶応大学出版会、2024年)が令和6年度芸術選奨(評論部門)文部科学大臣新人賞を受賞されたことを記念し、高橋先生を話し手として、同書で描かれた1938年のナチス・ドイツによるオーストリア併合(アンシュルス)前後のウィーンに集った芸術家や文化人らの動向についてご講演いただき、本学部の北原博先生(ドイツ文学)を聞き手とし、参加者を交えてディスカッションを行いました。今回は、その内容をお伝えします。

◎司会



館田晶子 先生

◎聞き手



北原 博 先生

◎話し手



高橋義彦 先生



司会を務められた法学部長の館田晶子先生(憲法学)の挨拶で始まった法学部カフェでは、まず館田先生から法学部カフェの趣旨と、今回のテーマと関わる高橋先生の受賞著書についての簡単など説明、登壇者である高橋先生と北原先生のご紹介がありました。その後、高橋先生からご著書の内容についてご講演が行われました。

高橋先生は、ご著書『ウィーン 1938年 最後の日々』の主題はナチス・ドイツのヒトラーによるチェコスロバキア併合(1939年3月)やポーランド侵攻(1939年9月)に先立つ初の対外侵略行為である1938年3月のオーストリア併合であること。すなわち、アンシュルスという歴史的事件に、ウィーンにいた政治家だけではなく、音楽指揮者や作家、学者といった様々な文化人がどのような影響を受けたのか、アンシュルス前の文化状況からその後の変容、ヒトラーと文化の関係などを広く叙述したものであるというご説明をなされたうえで、各章の内容をお話しされました。

第1章は、アンシュルス時のオーストリア首相であり、音楽などの文化への造詣が深かったク

ルト・シュシュニクの人物像と彼を中心とした政治動向について論じたことをご説明されました。本章のハイライトはアンシュルスの1か月前の1938年2月12日にドイツでシュシュニクがヒトラーと会談を行っており、その内容をドイツ語史料から翻訳して紹介したことであると述べられました。史料では、侵略をちらつかせて脅迫するヒトラーにシュシュニクが苦心して応答している様子が分かるということです。その後、シュシュニクはオーストリア帰国後にナチスの侵攻を防ぐために、国民投票を行い、オーストリア国民は独立維持を求めているという意思表示を実施する計画を立てたが、アンシュルスにより失敗に終わったというところで第2章のご紹介に移りました。

第2章は、アンシュルス前のウィーンの文化状況について、音楽家で指揮者のブルノー・ワルター、作家のフランツ・ヴェルフエルとアルマ・マラーラ夫婦、作家のエリアス・カネッティの3者を中心に描いたとご紹介されました。まずユダヤ系の出自であるワルターは、当時国立歌劇場の音楽監督を務めていたが、シュシュニクがヒトラーとの会談後にワルターの任期を3年間延長

するよう要請しており、ナチスが嫌うユダヤ系の人物を登用することでナチスと対抗する姿勢を、音楽を通じて示そうとした音楽と政治の関係が分かるエピソードであると述べられました。次にヴェルフェルとアルマ夫婦は、自宅にシュシュニク政権の閣僚や親しい作家などを集めて社交サロンを開催しており、そこからシュシュニク政権周辺にいた文化人と政治家の交流や動向を描いたといわれました。こうしたシュシュニク政権周辺の文化人に対して、次に登場するカネッティの場合は左派系で社会主義政党とつながりの深い人物であり、カネッティを通じてシュシュニク政権と対立する作家の動向を描いたとお話されました。オーストリアは1934年に政府軍と社会主義者の間で内乱が発生しており、カネッティはその時に逃走した社会主義者を自宅にかくまったというエピソードなどをご紹介されました。

第3章は、アンシュルス前夜の3月11日から3月12日にかけてのウィーンについて、シュシュニク政権や街の様子を、文化人の回想録や新聞記者たちの記録を用いて時系列に沿ったルポルタージュ風に描写したとご説明されました。第4章では、ヒトラーとウィーンの関係について、オーストリアのリンツで育ったヒトラーは若い頃に画家を目指し、ウィーン美術大学を2度受験したが不合格となっており、ウィーンに対する憧れと挫折という複雑な感情を持っていたこと。そのヒトラーがドイツの指導者として併合後にウィーンへ帰還するなかで、オーストリア国民はドイツ併合を歓迎するに至り、ユダヤ人への迫害を招く経緯を論じているとおっしゃられました。

第5章はナチス支配下の文化生活について、ジークムント・フロイト一家、ウィットゲンシュタイン一族、ヴェルフェルとアルマ夫婦という、ユダヤ系の3家族を主人公にして、ナチスによる支配下からの脱出の様相を描いたとご紹介されました。まず心理学者で精神科医だったフロイトの一家の場合は、フロイト家の上階に住んでいた患者でアメリカ人だったティファニー家の令嬢からの協力を受け、アメリカ大使館から保護を受けつつ、イギリスへ亡命することができたこと、ただしフロイトの妹は出国できず強制収容所で犠牲となったことを述べられました。次に一族が大資産家であり5人の兄弟姉妹だったウィットゲンシュタイン一族の場合は、弟たちがアメリカへ亡命したのに対して、姉たちはナチスに多額の献金をするによって併合後もウィーンで生活することができたといわれました。最後にヴェル

フェルとアルマ夫婦の場合は、フランスに亡命していたが第二次世界大戦後にナチス・ドイツがフランスを占領したことで、ピレネー山脈を越えてスペインへ密出国していく過程を描いたとご説明されました。以上のユダヤ系の家族たちを通じて、アンシュルス以降の文化人たちの苦悩を描いたとまとめられました。

終章では、1945年の終戦によってアンシュルスが解体し、オーストリアが再独立を果たしていくなかで、戦争末期のヒトラーと終戦後のシュシュニクのエピソードをご紹介されました。ヒトラーは出生地であるリンツをウィーン以上の文化都市に改造する計画を立てていたが、それは1945年2月という戦争末期のものであり、現実逃避の行動であったとご説明されました。またシュシュニクは併合から7年間、収容所に監禁されていたが、ソ連軍がウィーンを解放し、その後も占領したことで、反社会主義の人物であったシュシュニクはオーストリアに帰還できなかった。そこで彼はアメリカに渡り、大学教授として生活し、晩年になって故郷であるインスブルックに帰ることができたと述べられました。最後に、本書の特徴は、アンシュルス前後のオーストリアの状況を、政治家と文化人たちに焦点をあてて群像劇のような形式を描いた点にあるとまとめられ、ご講演は終了しました。

ディスカッション

高橋先生のご講演ののち、館田先生を進行役にディスカッションが行われました。はじめに、北原先生からコメントがありました。北原先生は、当初政治史、政治思想史に関する内容だと想像して読み始めたが、実際は群像劇のよう

に、様々な人物たちが主役を交代しつつ、アンシュルス期のオーストリアの政治や文化の状況を鮮やかで、なおかつ活き活きと描き出しているとコメントをされました。

このコメントを受けて、司会の館田先生から高橋先生に、本書を群像劇のように叙述したことの意図について、ご質問がありました。この質問に高橋先生は、①今まで研究してきたなかで発見し、おもしろいと思ったエピソードをすべて載せたいと思い、そのためには一人の主人公を主軸とするのではなく、群像劇のような形にすれば、様々なエピソードを紹介できると考えたこと。②戯曲「輪舞」のように、様々な人物を入れ替えて登場させつつも、ひとりひとは政治的な関係や子弟関係など何らかの形で、他の人物たちとつながっており、そこからそれぞれの人間関係のあり方を描き出したかった、という2つの意図があったとご回答されました。館田先生は回答を受けて、人物たちがそれぞれつながって内容が構成されていることの魅力について、感想を述べられました。

次に、館田先生は、政治家と文化人の社交サロンを媒介に交流していたという本書の内容に関して、フランス革命とサロンの関係のように、ヨーロッパのサロン文化が大きく政治に影響を与えていくような文化状況は、どのような経緯で成立し、展開したのかをご質問されました。北原先生は、サロン文化は19世紀単位ではなく、長い時間軸のなかで生成されてきたこと、サロンの運営は女性を中心であったこと、サロンで芸術家が自分の作品を紹介したほか、若い芸術家がサロンの人間関係を通じて社会に売り出されるなど芸術とサロンの関係について、ご説明されました。

次いで、館田先生はオーストリア、ウィーンの



文化はどういった特徴を持っていたのか、それはドイツの文化とどのように違うのか、オーストリアからみたドイツへの感情、あるいは両者の共通性などについて尋ねられました。高橋先生は、元々オーストリアは多民族国家のハプスブルク帝国の一部であったが、第一次世界大戦でハプスブルク帝国が解体した後ドイツ人の国家として残ったのがオーストリアであったと補足されたうえで、オーストリアはドイツと統合されたいという志向性が高かったとご説明されました。したがって、ウィーンとドイツの文化の区分けが難しい領域であるとおっしゃられました。

高橋先生のご回答をふまえて、北原先生は、ハプスブルク帝国の一部であったオーストリアにおいて当初、オーストリア単位で文化がまともだったのかは分からないとし、むしろオーストリアの人々がオーストリアという意識を持つよう

てくる。こうしたドイツと異なるという文化意識が1930年代にかけて形成され、アンシュルスでの断絶を経て戦後に再度、生み出されていく。③政治学ではオーストリアの国民意識は、第二次世界大戦後であり、その萌芽は1930年代のシュシュニク政権期に芽生え始めていたと、ご回答されました。

館田先生は、アンシュルス下のオーストリアの人々の意識が、戦後のオーストリア国民という意識の前提となっているのではないかとご質問されました。高橋先生は、1930年代にはオーストリアとしてのナショナリズムが弱く、それゆえにアンシュルスによる併合を招いたが、その結果、オーストリアはドイツの属国のような扱いを受けてしまった。こうした想定していたものとは異なるアンシュルスの経験が戦後の国民意識の形成につながっているのではないかと述べられました。

スクワ宣言において、オーストリアはヒトラーによる侵略の最初の被害者であると規定されたように、連合国側からオーストリアをナチスから解放する方針が示されたことを受け、戦後のオーストリアがそれに乗っかる形で、ナチスの被害者であることを打ち出すようになった。このとき、オーストリアとしてのナショナリズムを出したほうが、ナチスによるユダヤ人迫害の共犯者であるという歴史を隠すことができたとし、この問題は戦後のオーストリアにおいて長らく根深い問題として残り続けることになったとご説明されました。

次に、館田先生は亡命せずに留まり続けたユダヤ系の文化人たちについて、ご質問されました。高橋先生は、約200万人のウィーン人口の10分の1がユダヤ系だったが、終戦直後には約4000人しかウィーンに残っていなかったように、ほとんどが亡命か強制収容所に連行されたこととご回答されました。北原先生は、フルトヴェングラーやリヒャルト・シュトラウスなどのように、あえてナチスに迎合することで自分たちや身内のユダヤ人を守る文化人もいたことを補足でご紹介されました。

最後に、北原先生はシュシュニク政権でオーストリアの独立を企図した国民投票と、アンシュルスの是非を問う国民投票の結果の落差について、複雑なオーストリアの政治情勢がうかがえたとおっしゃられました。高橋先生は、国民投票の落差について、政治状況の流れに乗ってしまう大衆多数の存在が垣間見えるが、しかし当時の国民投票は秘密投票ではなく賛成票を入れることを前提としたものであったとしたうえで、シュシュニク政権も独裁政権であったことを考慮する必要があるとご回答されました。

このように、先生方のご専門の観点をまじえながら、議論が展開されました。その後、会場からの質疑応答では、参加者の方々から、秘密投票の意図や、戦後におけるオーストリアの国民意識とアンシュルス期のオーストリアの状況との関係、現在のオーストリアの政治的な立ち位置との関係など、非常に鋭く、多岐にわたる質問が投げかけられ、活発な議論が交わされるディスカッションとなりました。

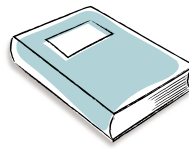
(構成:伊故海貴則)



になったのは比較的新しいことではないかと、高橋先生に尋ねられました。高橋先生は、①当初オーストリアはドイツと統一されたいという意識を抱いていたが、その後ナチスに併合されることによって、オーストリアとドイツは違うという意識を持ち始めるようになったのではないかと。②ナチス・ドイツではユダヤ系の音楽家の楽曲を演奏できなくなるなかで、オーストリアの文化は多様性があり、寛容であるとして、ナチス・ドイツと対比する形でオーストリアの文化がアピールされ

北原先生は、オーストリアはナチスによる併合の被害者でもあり、共犯者でもあるという高橋先生のご著書の一説をご紹介されたうえで、終戦後にオーストリアは被害者であると言われたことにはユダヤ人迫害に共犯したことの免罪符になったのではないかと、こうした被害者であるとする意識を打ち出していくためには、オーストリアという国家意識を高めていくしかなかったのではないかとおっしゃられました。コメントを受けて高橋先生は、イギリス・アメリカ・ソ連による1943年のモ

法学部の教員が近年出した書籍をご紹介します。情報や知識を得るためのツールが多様化し、簡便化していく現在。法学部に所属する法律・政治・一般教育の専門の研究者たちが綿密な調査をした上で書き上げた本を改めて手に取り、じっくりと読んでみませんか？本を開き、思考を巡らせれば、そこから新しい世界が広がっていくかもしれません。



伊故海 貴則 先生



伊故海貴則

『明治維新と〈公議〉—議会・多数決・一致—』
吉川弘文館 2022(本体価格12,100円)

- 日本社会における議会制度は明治維新时期に導入されましたが、それは帝国議会に先立ち、地方で先行して進められました。それでは、議会の導入にあたり、地域の人々はどういった反応を示したのか。本書では、明治期の静岡県地域を事例に、一人一票の「多数決」を備えた議会が地域社会のあり方をどのように変えたのかを検討しました。
- 多数決制度を備えた議会が日本社会に導入されたことから、身分制社会の解体(近代社会の形成)を見通そうとした点です。問題点がありますが、政治史としても、法制史としても、社会史としても、思想史としても意味がある内容だと自負します。
- 2020年に博士論文を執筆し、その内容を本として出版したいと思ったことがきっかけです。幸いに出版助成もいただけて、刊行に至りました。
- 博士論文が元になっているのですが、私の場合は抜本的に書き直したり、新しく追加した章もあって、執筆が終わったらヘトヘトになりました。
- ありがたいことに、多くの書評で取りあげられたほか、いくつかの学会賞をいただくことができました。なによりも研究で引用されているところを見ると、本を出したことに少しは意味があったのかなと嬉しく思いました。
- 近代社会の形成過程について、もう少し「人」に焦点をあてた研究書を書いてみたいですし、これまでの研究をまとめた新書を書きたいという気持ちもあります。いろいろ書いてみたいことがあって悩んでいます(笑)。

岩坂 将充 先生



今井宏平・岩坂将充

『エルドアン時代のトルコ 内政と外交の政治力学』
岩波書店 2023(本体価格5,280円)

- 2023年に建国100周年を迎えたトルコ。2002年以降同国を率いるエルドアンは、この約20年間でトルコに何をもたらしたのか。エルドアン時代の1つの特徴は、外交によって内政のバランスを変え、内政を念頭に置いた外交をしてきた、内政と外交の密接な関係にある。ポピュリズム的な手法で国内政治を掌握し国際社会でも存在感を増しているエルドアンと、彼のもとで変化するトルコ政治を、トルコの内政と外交を専門とする2名の研究者が読み解く。
- エルドアンという強力な政治家がどのように登場し、トルコをどう変えたのか、内政と外交の相互作用から分析した点が本書の特徴です。研究書ですが、時系列でトルコの政治の展開が詳しくわかるようになっています。
- 2023年はトルコ共和国建国100周年にあたり、トルコ政治の「今」を分析した本の出版を構想していました。そこで、同世代の研究者仲間と外交を専門とする今井宏平さんと一緒に、内政と外交の両面からアプローチしてみると面白いかなと思い、本書の企画にいたしました。
- 共著者の今井さんはトルコでの留学時代が少し重なっているのですが、お互い当時のことを振り返りながら、イメージを共有しつつ違ったアプローチで執筆できたことが楽しく、またとても刺激になりました。
- 刊行後もトルコ政治は変化し続けていますが、それでも現在をよりよく理解するためにはエルダンの長期政権の仕組みを知ることが不可欠です。トルコだけでなく、世界的な政治の潮流を読み解くためにも役立ててもらえているようです。
- トルコに軸足を置きつつ、政軍関係や政治変動についていろいろな国の事例を比較する共同研究を進めているので、いずれ本にまとめたいと思います。夏頃には、近いテーマをあつかった翻訳本も出版予定です。

高橋 美野梨 先生



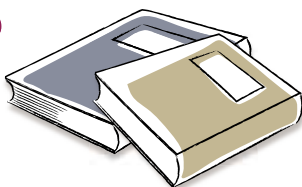
高橋美野梨編著

『グリーンランド—人文社会科学から照らす
極北の島』
藤原書店 2023(本体価格3,960円)
執筆担当:序章・第1章・第5章・第7章・終章

- 北緯59度から83度、大部分が北極圏に位置し、面積は日本の約6倍、エスキモーとスカンディナヴィアの人たちとの合流の地であるグリーンランドは、同じ遺伝子ルーツを持つアラスカ、カナダのエスキモーに比べて、西(エスキモー)と東(非エスキモー)の世界観とが釣り合いを保ちながら混淆していると評される。人類学、政治学、歴史学、宗教学、文学など人文社会科学の知見を持ち寄って、その混淆の輪郭をたどり、この世界最大の島における人間の営みを多角的に描き出す、日本で初めての論集。
- デンマーク人2名を含む国際共同研究を通じて、10世紀以降のグリーンランド・エスキモー社会における歴史的身体の形成過程を、キリスト教との習合、さらには自立と協働を軸としたデンマークとの交易関係の展開という観点から、人文社会科学の知見を結集して跡づけたところ。
- 2013-18年に実施したグリーンランド捕鯨史調査の中で、生存の規律であり自己呈示の装置でもある狩猟儀礼が、当地では喪失している可能性に気がきました。他方、同じ遺伝子ルーツを持つアラスカやカナダのエスキモー社会では、儀礼は今も生きている。なぜグリーンランドでは儀礼が失われた(可能性がある)のか。この問いが『グリーンランド』の背骨となりました。
- 学振PDから助教時代にかけての在り余る時間の中で、文化人類学者のスチュアート・ヘンリー先生と共同で取り組んだグリーンランドでのフィールドワークと民族誌の精読が強力な土台となり、執筆の推進力ともなりました。海面に乱反射する北極の強い日差しの下での調査を思い返しながら、楽しく筆を進めることができました。
- 『史学雑誌』等での書評は研究者に、『読売新聞』等での書評は一般の方々に、それぞれリーチする機会に恵まれました。また、2024年12月のドナルド・トランプによるグリーンランド併合発言が契機となり、グリーンランドへの関心が高まる中で、本書も一定の読者層に届く機会を得ました。

- 今年度中の刊行を目指している本が二冊あります。一つは、グリーンランドを主たる事例に、互酬的自然観と功利主義的自然観の交錯を分析し、その対比対象としてEUの捕鯨政策を取り上げる英文単著。もう一つは、編者として準備を進めている『アイランド・グリーンランド・北極を知るための65章【第2版】』です。

法学部教員は どんな本を書いているの？



- 内容説明
- オススメポイント
- 執筆のきっかけ
- 執筆時のエピソード
- 刊行後の反響など
- 次はこんな本を書きたい! or 書く予定です!

法学部教員は どんな本を書いて いるの？



韓 永學 先生



韓永學

『メディア・アカウンタビリティとプレス評議会』
日本評論社 2023(本体価格6,600円)

① 本書は、メディアの公衆の要望に対する応答プロセスである「メディア・アカウンタビリティ(media accountability)」の理論と制度を体系的に考察すると共に、最も有用なメディア・アカウンタビリティ制度であると評価される、プレス自主規制機関の代表格であるプレス評議会(press council)制度について多面的な国際比較を行い、そこから得た知見に基づき、日本版プレス評議会の創設に向けた探究及び提言を行うものです。

② 本書は、メディア・アカウンタビリティの観点からプレス自主規制機関について深く掘り下げた学術書(令和4年度科研費「学術図書」として、メディア・アカウンタビリティの理論的考察、プレス評議会制度の国際比較を踏まえ、日本版プレス評議会の創設に向けた探究及び提言を行っていることがオススメポイントです。

③ 在外研究時(2012年度、英国ロンドン大学)に、英国において新聞の「電話盗聴事件(phone hacking scandal)」を受けて白熱していたメディア・アカウンタビリティの強化とプレス自主規制機関の改革議論を観察したことをきっかけに、メディア・アカウンタビリティの観点からプレス自主規制機関の在り方に関する研究を進め、本書の執筆に至ったのです。

④ 執筆時のエピソードとして最も記憶に残るのは、「道新記者逮捕事件」(2021年6月)の社内対応についてインタビューを受けたことを機に、メディア・アカウンタビリティの重要性を改めて実感し、本書の執筆の意義を強く感じる事ができたことです。

⑤ 本書刊行後、日本メディア学会メディア倫理法制研究部会において本書から得た知見を述べる機会を得る等、若干の反響を呼びました。

⑥ 今後、「メディアの自由と多元性の保護」に関する本を執筆または翻訳する予定です。

五十嵐 素子 先生



五十嵐素子・平本毅・森一平・團康晃・齊藤和貴(編)
『学びをみとる—エスノメソドロジー・会話分析
による授業の分析』
新曜社 2023(本体価格3,100円)

執筆担当:
Introduction 生徒の学習経験を理解する、Lecture1 教育実践を読み解く視点としての「相互行為の方法」 Lecture2 相互行為の方法に着目して「授業の展開」を観察する、1章 授業会話を作り出す、3章 エピソードでひきつける、5章 ペアで学習活動する、7章 教科を横断して活用する、8章 授業を分析的に振り返り、考察を次の実践に生かす。

① 生徒の学習経験を捉える確実な方法は、学習活動を相互行為(やりとり)として捉え、「みとる」ことである。エスノメソドロジー・会話分析に基づき、授業実践の方法から学習経験の把握、授業の振り返りの仕方まで、豊富な事例で示した本邦初のテキスト。

② 「なんだか難しそう…」と感じるかもしれませんが、実はこの本は、日本の授業を「やりとり」の視点から分析した、ありそうでなかった一冊なんです。先生と子どもたちの会話や動作に注目すると「そうだったのか!」という発見がきっとあると思います。これまでの授業研究に新しい視点を加えられればと思っています。

③ きっかけは、私(五十嵐)が、教員養成大学に勤務していたときに、「日本の授業のデータを使った、リアルな分析例が載っている教科書があればいいのに」という切実な思いからでした。「この分析方法は絶対に現場の役に立つはず」という熱意から、研究仲間たちに声をかけ、この本の企画がスタートしました。

④ この本は、ただ原稿を書くだけでなく、執筆者みんなで実際の授業場面を分析する検討会を何度も開いて作られました。会話分析のベテラン研究者が鋭くチェックする一方で、現場経験の長い先生が「現場の先生に読んでもらうには、この言葉じゃないと伝わらないよ」と助言するなど、まさにチームワークの結晶!専門的でありながら、現場の先生に届くように、というこだわりが詰まっています。

⑤ 教育業界で著名な先生に、大変好意的な書評して頂きまして、本当に嬉しかったです。また、いろんな大学で教科書に使って頂いたり、研究会で読んで頂いたりしているようで、有難く思っております。

⑥ 1人1台端末が実現した今、PCを用いた授業がたくさん行われるようになりました。一斉授業もそうですが、グループワークのやり方も変わってきています。現在、調査中なのですが、調査を踏まえて、ICT機器を用いた教育実践における学びを分析した書籍を書きたいと思っています。

門間 広明 先生



進藤久乃編

『戦後フランスの前衛たち 言葉とイメージの実験史』
水声社 2023(本体価格6,000円)

執筆担当:
ある概念の生成—アンテルナショナル・レトリストと「転用」の理論

① これまで日本ではあまり注目されてこなかった第二次世界大戦以後のフランス(およびその周辺国やその影響を受けた日本)の前衛芸術をめぐる論集。コブラ、レトリズム、アンテルナショナル・シチュアシオニストといった前衛グループ、ポーラン、ボンジュ、コレージュ・ド・パタフィジック、ペケットなど前衛周辺の作家たち、音声詩、視覚詩、パフォーマンス詩など詩的实践の新たな展開、また北脇昇や新国誠—ら日本における受容と発展も含め、現代に至るフランス前衛運動の見取り図を描き出す。

② 「前衛」という言葉には時代の先を行くイメージがありますが、本書は「新しいことはすべてやり尽くされてしまった」感のある第二次世界大戦後の前衛芸術をテーマにしています。威勢のいい時代が終わってしまった後で、それでも前衛であろうとした芸術家たちの多様な試みを、「こんな人たちがいたのか!」という驚きとともに知っていただければ幸いです。

③ コロナ禍で中止になってしまったシンポジウムで発表予定だった人たちで、同じテーマで論集を作ろうということで企画し実現しました。海外の研究者数名を含め、シンポジウムで発表予定だった人たちに以外にも寄稿してもらうことができて、とても充実した内容になりました。

④ 論集ということで編者や他の執筆者・翻訳者とやりとりしながら作業を進めましたが、みなさん素晴らしい方々で、おかげで楽しく執筆できました。

⑤ 刊行記念イベントをやったところ、客の入りは寂しかったのですが、現役の芸術家や詩人の方が来てくれたのが嬉しかったです! また本書の刊行が一つのきっかけとなって「レトリズムと戦後前衛研究会」という新しい研究会が立ち上がり、順調に活動が続いています。

⑥ 自著ではなく翻訳ですが、ルーマニア出身でフランスで「レトリズム」という前衛芸術運動を始めたイジドル・イブズ—という人の本を研究会の仲間たちと翻訳中です。この人は日本では初訳になるので詳しい解説をつける予定ですが、それを私が書くことになったので、資料を漁りつつ準備を進めています。

- ① 内容説明
- ② オススメポイント
- ③ 執筆のきっかけ
- ④ 執筆時のエピソード
- ⑤ 刊行後の反響など
- ⑥ 次はこんな本を書きたい! or書く予定です!

分野の壁を超えて、 価値観を変えて

日記を読み続けた学生時代

私は日本政治史を専門としています。特に1920～30年代、戦前日本の「政党内閣期」と呼ばれる時代の政権について研究してきました。

香川の田舎で育った私ですが、特段成績が優秀であったわけでもなく、高校までの日本史教科書以上の知識はほとんど持ちあわせていませんでした。なので、まさか自分が大学の教壇に立つ日がくるとは夢にも思いませんでしたし、札幌に住む日が来ることも全く想像できなかったです。そのような私を学者の道に導いてくれたのは、戦前の時代を生きたある政治家の日記でした。

大学2年の春休み、研究テーマを決めかねていた私は、図書館の書架を眺めていてふと興味を惹かれ、牧野伸顕（大久保利通の次男。約15年にわたり宮内大臣・内大臣を務め昭和天皇を支えた人物）の回顧録を手に取りました。その内容がとにかくおもしろくて、それからは毎日彼の残した日記を読むことに熱中しました。100年以上前の、現在とは全く異なる価値観の時代を生きた政治家の生の声から、当時の政党政治について考えるのが楽しく、研究に「ハマった」のがすべての始まりでした。

「植民地台湾」との出会い

日本史研究者には様々なタイプの人があります。具体的なテーマ（陸軍、外交や医療、教育など）に絞って博士論文を書き上げるのが通常です。一人の政治家に着目することで新たな政治史像を描く方法や、どこかの地域の史料から何か具体的な事象を読み取る方法もあります。

しかしながら、私は「1920年代の日本中央政治史」以上の具体的なテーマがなかなか定まりませんでした。大まかには「なぜ近代日本の政党政治が崩壊したのか」を問いに設定していましたが、卒業論文で検討した天皇側近の視点だけではどうも限界を感じていたので

「節操がない」といえるかもしれませんが、とにかく政党政治の本質が見えるのであればどこ



十河 和貴

からでもアプローチしようと考え、色々なテーマに挑戦してきました。その状況を打開するきっかけとなったのは、1920年代前半に政治的影響力を持っていた貴族院議員・田健治郎という人物（彼も日記を残しています）が台湾総督に就任していたことから、日本の植民地統治について研究し始めたことでした。また、当時アルバイトをしていた職場の仕事で、台湾銀行頭取を務めていた中川小十郎という人物についても研究しました。「植民地台湾」との出会いです。

植民地研究という分野では、数多くの専門家による研究蓄積があります。台湾銀行であれば、当然ながら経済史による分厚い研究があります。これらに正面から挑んでも勝てるわけがない。そこで、「自分は中央政治の視点から台湾銀行の経営を見る」という強い信念を持ち研究したことで、経済的経営を政治構造として把握する研究方法を得ることができたのです。すると徐々に、日本政治だけでは見えてこない、植民地だからこそ浮かび上がる政治構造がみえるようになりました。この方法から、外交史や産業政策史など多様な政策について中央政治の視点から検討を重ねたことで、無事博士論文を書き切ることができました。「植民地」との出会いが、間違いなく私の研究の幅を広げてくれたのです。

「政治史にとらわれない政治史」を

近代国家以降の社会においては、ほとんど

の事象が何かしら「政治」にかかわります。その意味では、どのようなテーマでも「政治史」になりえるのです。私は北海学園大学に来る前まで、前任校で日本近代史ゼミを担当していました。このゼミは「近代史」とは名ばかりで、2000年代以降の文化など「超現代史」をテーマに設定する学生さんも数名いるなど、驚くほど多様なテーマが出てきました。これはどう指導したものか、と最初は戸惑いしましたが、そこではいわゆる「政治史」の視点からは見えてこない多くの政治力学が発見されました。

たとえば何らかの病気を研究するとします。当然そのテーマには多くの医学史による専門的研究がありますが、これを「政治」として捉えると何がみえるか。病気の治療薬を普及するには国からの補助金が欠かせません。それを得るためには地方自治体や所轄官庁（厚生労働省など）に働きかける必要があり、政策立案、政党との交渉、国会での議論と様々なステップを踏みます。その過程にかかわる政治家がどのような論理から賛成ないし反対意見を述べているかを注視すれば、同時代の政治情勢や日本政治における構造的な問題点が浮かび上がってきます。どの政党や官庁も消極的であったとしても、場合によっては1人の熱心な政治家が政策を動かすこともあるわけです。また、そこには様々な中間団体も絡んできます。

こうした課題を研究することで、多様な利害関係を日本政治が歴史的にどのように解決してきたのかを学ぶことができます。日本政治史の奥行きはとても広いと思います。

学生とともに学ぶ

このように、日本政治の本質は、どのような角度からでも捉えることが可能です。限られた時期における、中央の政党や官僚の政治構想ばかりに目を向けていた私にとって、ゼミ生たちが選択したテーマから出てくる史料はどれも新鮮なものばかりで、目から鱗のような結論が出てくることもありました。

幸い本学でも、日本政治史ゼミを担当できることとなりました。学生の皆さんの関心には豊かな可能性が含まれています。学生とともに学び、私自身成長していけるような教育者になることが目標です。多様なテーマから、皆さんとともに新たな日本政治史理解を構築していきたいと思っています。

（法学部准教授：日本政治史担当）

OB・OG 友達紹介 第23回



たけざわ はじめ
竹澤 一 さん

(北海道大学法科大学院2年課程1年生)

——今回ご紹介するのは、竹澤一さんです。竹澤さんは、本学法学部で法曹養成プログラムを修了され、今年3月に3年生で早期卒業後、北大の法科大学院2年課程に進学されました。法科大学院を目指すようになったきっかけを教えてください。

きっかけは1年生の基礎ゼミでした。大学入学時は法科大学院への進学は全く考えていなかったのですが、基礎ゼミ担当の先生が弁護士の先生で、ゼミを履修するうちに、自分も将来弁護士になりたいという気持ちが芽生えました。北海学園大学法学部で北大法科大学院と連携する法曹養成プログラムが始まっていたので、その制度を使って進学したいと思うようになりました。

——入学後の基礎ゼミがきっかけだったのです

ね。本学在学中は勉強ばかりの生活だったのですか？

いえ、そんなことはないですね。部活やサークルには入っていませんでしたが、卒業するまでアルバイトをしていましたし、旅行が好きなので、アルバイト代を原資に、日本国内様々な所に行きました。もちろん友達とご飯に行ったり遊んだりもしていました。

——てっきり勉強漬けの生活をされていたのだと思っていました！どのような勉強をされていたのでしょうか？

まずは、司法試験予備試験短答式の問題を解くことができるようになることを目標にしました。また、勉強は、判例百選に掲載されている裁判例を理解することに重きを置いて、判旨を読み、重要と思われる部分を覚えめました。基本書については、主に大学の授業で指定された教科書を読みましたが、自分に合わないと思う教科書については、違う本を探しました。

——実務家を目指されているのですから、裁判例の理解は大変重要ですね。法科大学院入学後はどのような生活をされているのですか？

今のところ、授業は一日二コマ程度です。授業と授業の間に空き時間があるときは大学の自習室で勉強しています。法科大学院の授業は授業中に当てられるので、日々かなりの量の予習復習が必要になります。次の日に積み残しがないよう、毎日の復習はその日のうちに終わら

せるよう心掛けています。

——良い心掛けですね。将来は弁護士志望とのことですが、どのような弁護士を目指されていますか？

もともと社会問題に興味があって、法学部に入学しました。新聞をよく読んでいたのですが、社会の不条理を感じさせるニュースに接する度に、そのような不条理を少しでも無くす活動をしたいと思っていました。今は特に、学部時代に履修した授業の影響もあって、将来弁護士として、子供の権利を保護する活動をしたいと思っています。

——最後に、同じ目標を持つ後輩へのアドバイスをお願いします。

そうですね…勉強は少しでも毎日することと、勉強を続けるモチベーションを落とさないようにすることでしょうか。私は、学内で授業を担当されている弁護士の先生と話をしたり、G-PLUS上で告知されていた弁護士会主催のイベントに参加したり、それから行政書士試験合格を中間目標に設定したりして、モチベーション維持に努めました。

——竹澤さんのアドバイスは、きっと後輩に響くことでしょう。ありがとうございました！

《次号に続く》

(構成：稲垣美穂子)

新任教員のご紹介



十河 和貴 先生

本年度より「日本政治史」を担当します。戦前の政治家たちが何を考え、時々の政治課題にどのように取り組んだのかを、臨場感をもって再現できるような授業を心掛けていきます。魅力あふれる札幌の地で、みなさんと学びを深めていけるのを楽しみにしています。

香川県さぬき市出身。2016年立命館大学文学部卒業、2022年立命館大学大学院文学研究科博士課程後期課程修了。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員(DC1)、立命館アジア・日本研究機構専門研究員などを経て、2025年4月より本学法学部政治学科准教授。専門は日本政治史、日本近現代史。



津田 裕介 先生

この度、かねてより憧れていた本学法学部の商法スタッフに迎えていただきました。多くの皆様のご助力やご縁に恵まれたからこそだと感じております。感謝の気持ちを忘れず、常に謙虚に冷静に、しかし情熱の炎は絶やすことなく、研究に教育に邁進して参ります。

神戸市出身。大阪大学大学院法学研究科博士後期課程単位取得退学。大阪大学大学院法学研究科助教、札幌大学地域共創学群法学専攻専任講師及び同准教授を経て、2025年4月より本学法学部法律学科准教授。専門は会社法。